

「素晴らしい御子による和解」（壮大な神の救い）

コロサイ 1：18～20

堀田修一 25・4・6

I 「御子は初め（新創造の始源・活力源、創造的な主導権・時間と地位の両方の主導権を持つ方）であり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、すべてのことにおいて、第一の者となりました」：18。「死者の中から最初に生まれた方」→「主イエスは、私たちの罪（偶像礼拝、憎しみ、恨み、ねたみ、不品行、偽り、貪り）のために死に渡され、私たちが義（罪が赦され無罪とされ神と正しい関係に入れられる義）と認められるために、よみがえられた」（ローマ4：25）。いのちの始め、源である方として死を克服してよみがえられた。新創造の最初、始まり。そして主は、終わりの時、主の再臨の時に起こる主を信じ主につながっている者たち（私たち）の復活の保証となられた。イースターに新しい時代の力が到来した。「こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです」→御子は当然そうなるはずであり、また実際にそうになった。神のご計画は、今までの被造物をまとめることなく、御子を通して新しい創造を始めること。御子は、「万物より先に存在し」（：17）、復活において「第一のものとなられた」。※コロサイの異端は、御子に関するこの真理を否定していた。究極のへりくだりの十字架の死の後、復活し天に昇られ、御子が本来持っておられた地位（「第一のもの」）が明らかになった。

II 19、20節は、18後半の説明。御子の復活の背後にある神の目的。それは和解の愛。「なぜなら神は、ご自分の満ち満ちたものをすべて御子のうちに宿らせ」：19。人となられた御子の本質の格下げをしていた異端に対して、御子のうちに神の本質が完全な形で宿っていることが語られています。

III 「その十字架の血によって平和をもたらし、御子によって、御子のために万物を和解させること、すなわち、地にあるものも天にあるものも、御子によって和解させることを良しとしてくださったからです」：20。御子の十字架の血による万物の和解こそ、神の救いの中心。壮大な神の救い。

1. なぜ和解が必要か→神が造られた最初の人アダムとエバは造り主の神と良い関係、夫婦も互いに支配せず愛の良い関係を持ち、健康で自分たちの仕事を愛していた。しかし、ある日、神の命令に背き、善悪の知識の木の実を食べ神に罪を犯した。神、支配者になり代わろうとした（創世記3章）。その結果、
 - i いのちの源である神との関係の断絶。神はアダムとエバに物質的、关系的、霊的にもすべての必要なものを与えておられた。人が神のようになろうとした時、人は神から離れて独立独行の道へと堕ちてしまった。造り主の神に従わず、我が道を行き、神のやり方に背き、滅びに向うようになった。主なしの私。
 - ii 関係の二重の喪失。神との関係を失い、人間との互いの関係も悪くなってしまった。神との親密さ、また人との互いの親密さが、恐れ（創世紀3：10）や隠し事、不信感等にとって替わ

られた。人は、互いに愛し合う関係ではなく、互いに支配し合う関係、支配される関係になってしまった（創世記3：16）。自分に対する自制を失い、自分の周りの事、他者をあたかも神のごとく何もかも支配しようとし始めた。自分の人生はどうしていいのかわからないのに、周りの人々や状況を支配しようとしてしまう。

- iii 自分との関係も壊れた。自制（セルフコントロール）がない。自分を受け入れられない。演技をし、自分の本当の姿を隠すようになった（創世記3：7～10）。実際よりも良く見せようとして自分を偽るようになってしまった。仮面の人生。
- iv 神が造られた万物、被造物、自然との関係が壊れた（創世記3：17～18）。共存の難しさ。

2. 神が和解を成り立たせてくださった方法とは→「その十字架の血によって平和をもたらし」「御子（神であり人である御子のみが資格のある方）によって万物を和解させることを良しとしてくださった」。神は豊かな恵みを人に与え何も悪いことはなさらなかったのに、人の側が神に背いた。にもかかわらず、神のほうから御子をこの世に送り、御子の十字架（私たちの数え切れない罪のための身代わりの死）の血（私たちのすべての罪の償いをする代価）によって平和（私たちの罪が赦され神との平和な関係）をつくり、和解させてくださった。「神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことは私たちに委ねられました」（Ⅱコリ5：19）。御子による和解の恵み

- i いのちの源である神との関係が回復し、神と繋がり人生を生きる。罪を犯してしまったら、もう駄目だと思わず、罪を隠さず神に正直に告白し神に赦されきよめられて生きる。Ⅰヨハネ1：9。変わらない愛で神に愛され続け、それを心から感謝し私たちも神と隣人を愛して生きる。
※この真の幸いを感謝！

- ii 自分との関係。自己中心の愛ではなく、神が愛されている愛で自分を愛する、自己受容。神が赦された自分を自分でも赦す。御霊の実である自制を持つ。聖霊の宮としての体を大切にする、聖霊の宮としての健康管理。Ⅰコリント6：19, 20。証し：この恵みを感謝。

- iii 人と人との和解の関係。互いに支配する、支配される関係から、互いに神の愛で愛し合い、赦し合う、支え合う関係へ。神に頼り偽りを捨て真実に向き合う、真実に分かち合うプロセスを通りながら。エペソ4：25。期待、要求を押し付けてさばくのではなく、まず現実のお互いを受け入れる。ローマ15：7。人は真実な愛で受け入れられて始めて、変えられるという行程が始まる。ローマ8：31～39→12：2。証し：この変化を受け続けている。

- iv 「御子によって万物を和解させることを良しとしてくださった」：20→御子による和解は、人間にだけではなく、神が造られた世界全体、全被造物に及ぶもの。「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われ（主の再臨による）を待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望み（より輝かしい将来＝被造物も新しくされる望み）があるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます」ローマ8：19～21。全被造物、自然、生物も主の再臨による新創造、新天新地を待ち望んでいるのです。

「また私（ヨハネ）は見た。そして御座と生き物と長老たち（神の民）の周りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の数万倍、千の数千倍であった。彼らは大声で言った。『屠られた子羊（人間の罪の刑罰を受け十字架で死なれたキリスト）は、力と富と知恵と勢いと誉れと栄光と賛美を受けるにふさわしい方です。』また私は、天と地と地の下と海にいるすべての造ら

れた者、それらの中にあるすべてのもの（神が造られた全被造物、全世界、宇宙、自然、動物、植物ほかすべて）がこう言うのを聞いた。『御座に着いておられる方と子羊に、賛美と誉れと栄光と力が世々限りなくあるように。』すると、四つの生き物は『アーメン（その通りです）』と言い、長老たちはひれ伏して礼拝した」黙示録5：11-14。

主の再臨は近づいていますが、いつかはわかりません。主の再臨による新天新地では、天使たちと主を信じ栄光の姿に新しくされた神の民と主の十字架と復活と再臨により新しくされた全被造物、万物による神への礼拝がささげられます。何と素晴らしい事でしょう！神のことは、66巻の聖書は、「はじめに神が天と地を創造された」（創世記1：1）で始まり、聖書の最後のみことばは「主イエスの恵みが、すべての者（原語：パンタ＝主を信じたすべての人々だけではなく、すべてのもの＝万物の意）とともにありますように」黙示録22：21。これはキリストの「恵み」が全被造物に及ぶようにとの神の宣言。黙示録が恐怖の書ではなく、恵みと平安の書であることを示しています。最後のみことばは、全聖書の結びであり、聖書の初めと対応している。

祈り：主の十字架による万物との和解の恵みを感謝します！